

## 分子構造総合討論会 2006 静岡

分子構造総合討論会2006静岡は、2006年9月20日～23日に静岡市のグランシップ(静岡県コンベンションアーツセンター)において開催された。この討論会は毎年秋に開催される、我が国の分子科学分野における最大規模の討論会であり、既に30年以上の歴史を持っており、その主題は、分子および分子集合体の構造、物性、反応に関する分子科学分野全般の理論・実験を含み、参加者は毎年約1000名、発表件数も900件程度(ポスター含む)に達している。討論会は全国各地を回り持ちで開催され、日本化学会および当該地区の日本化学会支部との共催で開催されているように化学の色彩はあるものの、化学物理、物性物理、生物関連の分野などの隣接領域からの発表もあり、また分子科学分野とその周辺全体に目配りした招待講演、特別講演を含むなど、他分野に対しても広く開かれている。この討論会は、不均一系化学反応の新しい計測法の開発とそれを駆使した反応ダイナミクスの解析を目指す「極微構造反応」とは最も関連深い会議であり、A01班からA04班までのすべての班から万遍なく班員が参加しており、総勢は50名(分担者・班友を含む)を超えた。講演は5会場同時進行で行われ、セッションの数も12に及ぶためすべての紹介は省略するが、筆者も参加した生体関連のセッションでは、不均一系の代表である細胞やその機能部位を構成する生体関連分子を研究の対象とする発表が数多くなされた。このセッションには、特にA01班の班員が多数参加し、細胞内に反応場を構築する手法、細胞観察のための最先端分光計測法などの最新の研究について講演し、収容数300名を超えるホールをいっぱいにするほどの盛況ぶりであった。

さて、生体関連のセッションは、近年の需要に伴って2003年に新たに設けられた分野である。初年度は口頭発表が9件、ポスター20件の小規模でのスタートであったが今年度は口頭発表25件、ポスター38件を数え、最も成長の著しい研究分野の1つである印象を強く受けた。生体関連のセッションだけでなく、赤外・ラマンはもとより、クラスター、表面・界面、理論(計算)化学のセッションでも生体関連分子を研究の対象とする発表が数多くなされた。もともと日本は、生体分子の振動分光学の分野では長い伝統を誇りアメリカとともに世界をリードしてきたので、生体分子の分光学的研究を受け入れやすい土壌であるのかもしれないが、やはり分子科学分野においてもバイオサイエンスが大きな潮流となっていることを感じずにはいられなかった。その流れの中で、「極微構造反応」の目指すものがバイオサイエンスあるいはナノサイエンスなどの発展著しい分野の基礎を担う(あるいは開拓する)ものであり、年々、その重要性が増してきていることを改めて認識させられる討論会であった。